桃だより 6月号

桃だより

✍ 今月の桃やき！

あの日の矢飛び

＊　なかむら　＊

矢飛びは自分だけのもの、人の矢はその人にしか分からない。高校の頃、さる知恵袋の方に諭すように言われたことだ。しかし、いままで印象に残っている矢飛びが二つある。一つは点のごとく的に飛んでいった自分の矢（これは手前味噌なので割愛）。今ひとつは、高校の大先輩Ｋさんの飛ばした矢だ。

人の飛ばす矢であれほど印象に残っているものは他にないと思う。弓道部ＯＢのＫさんは滅多に学校の道場に来なかったが、たまたま暇だったのか、あるとき弓を二張ほどかかえて指導にやってきた。当時四〇歳を過ぎていたと思うが、以前は三〇キロの弓を引いたとか、半日で一〇〇〇射引いたとか、兎角そういう武勇伝のようなことばかりは知っていたものだから、きっと堂々たる弓を引くものだと勝手に想像していたが、実はそうではない。的前に立ったＫさんは、肘力を眉の真上までとって、エレベーターのように両拳を落としてくる。矢の本矧が唇の手前に来るほど引尺が小さく、会も二秒ほどだ。なんというか、普通の人が想像するキレイな引き方ではない。がっかりしたような、面喰らったような気持ちだった。

ところが、半月のような引き成りの弓から放たれた矢は途中から加速して的に吸い込まれるように的中した。何度引いても矢は水平の弾道を描き、どう見ても的の手前で加速している。すぐさま矢取りのふりをして、的中した矢を見に行った。矢は細っこい竹の篦で、変わった形の羽根との間には金箔が貼ってあった。的まで駆けていったのは、初めて見る世界に興奮していたからかもしれない。

ずいぶん後になって、それが麦粒の篦と石打の羽根であることを知った。麦粒というのは、堂射用に開発された両端を細く削り重心を後ろに据えた篦のこと。石打は一羽の鷹から二枚しかとれない羽だ。麦粒＋石打のコンビネーションは値段も最上級だが、下手に引いたら浮く、矢色がつく、真っ直ぐに飛ばないの三重苦で、射手を選ぶ。ましてやこれを近的で使うなど、まず恐くてできない。Ｋさんはそれを点で飛ばしたのだ。

それまで矢は空気を裂いて重力を表現しながら放物線に飛ぶものだとばかり思っていたのかもしれない。だから、殆ど失速しない矢が途中から加速したように見えたのだろうか。あの日の矢飛びは、いまだに鮮烈さをたたえている。自分でもおどろくほどの良い矢が出たら、人に誉められなくてもそれは良い矢で、反対に、良いと言われても矢が失速したの

ならあまり満足できないものです。矢飛びに敏感であることは稽古に必要なことかと思いますが、夜間に引く方も多く、矢乗りが見えないことも多いと思います。しかし、真っ直ぐに出た矢は武道センターの照明具合なら必ず夜でも見えます。いつもより早い矢が出たら、その手応えを足がかりに一緒に稽古をがんばっていきましょう。